

# Q<sub>8</sub>

## 農産物の生産現場ではどんな放射性物質対策が行われたの？



# A

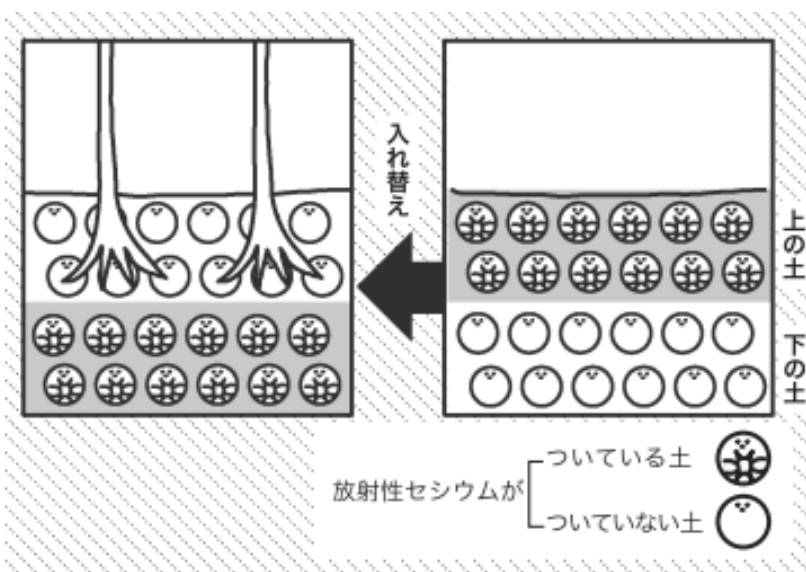


通常より深く耕す「深耕」や上下の土を入れ替える「反転耕」、ゼオライトやカリ肥料の施肥、樹皮の洗浄など、事故由来の放射性物質の吸収を抑えるいろいろな対策が講じられました。

### 農地の場合

事故当初、放射性セシウムは、田んぼの表面付近の土に吸着していて、比較的浅い場所にとどまっていた。そこで、稲に吸収されないように通常より深く耕す「深耕」や上下の土を入れ替える、「反転耕」を行いました。反転耕とは放射性セシウムが付着している表層の土と汚染されていない下層の土を30cm程度の深さでひっくり返して入れ替える方法です。これで稲の根が伸びている部分の土の放射性セシウム濃度を減らしました。

反転耕とは



出典：環境再生プラザ「なすびのギモン食品編」

### 果樹園の場合

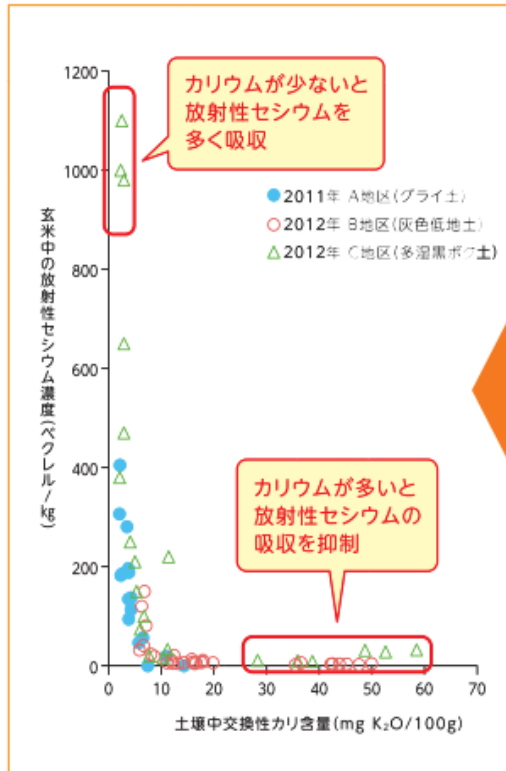
事故直後、放射性物質は雨や雪などと一緒に地面に降っただけでなく、樹木の樹皮にも付着しました。樹木のある場所とない場所を測ると、樹木のある場所の方が放射線の線量率が高く、樹木に付着した放射性物質が樹皮などから樹体内、葉、果肉に移ることもあったことがわかりました。そこで、樹皮を高圧の水で洗ったり皮を削ったりしました。放射性セシウムは時間とともに減少する性質があり、さらに雨などによって樹皮から流されていきます。

### ポイント

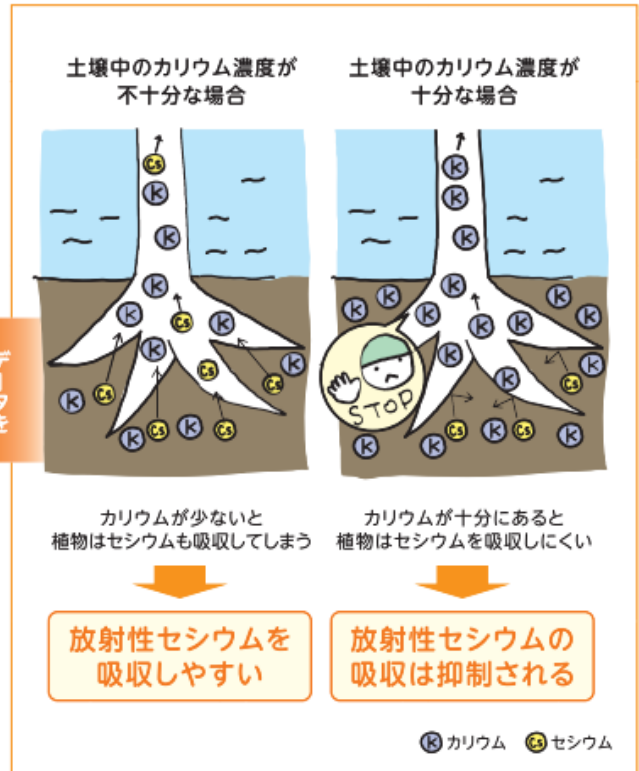
農作物は、放射性セシウムの吸収抑制対策を徹底した上で生産されており、安全性の確保が図られています。

## ゼオライトとカリ肥料による放射性セシウム対策

「深耕」や「反転耕」に加えて、放射性セシウムを吸着する性質があるゼオライトやカリ肥料をまきました。カリウムは、植物の生育に必要な不可欠な栄養素で、自然な状態で土の中にあり、セシウムがこのカリウムと化学的に性質が似ているので、土の中にカリウムが少ないと植物は区別できずにセシウムを吸収してしまいます。カリウムが十分にあると、植物はセシウムをほとんど取り込まなくなります。また、放射性セシウムは、土にくっつきやすい性質をもつため、土の隙間に入り込むと水に溶け出しません。セシウムが根から吸収されにくくなります。



【出典】福島県農業総合センター  
「水稲の放射性セシウム吸収抑制対策について」より作成



【出典】農林水産省「農業生産現場における対応について」平成25年2月より作成

出典：環境再生プラザ「なすびのギモン食品編」

## 米の検査について

福島県の農産品については、県が緊急環境放射線モニタリング検査を実施し、その検査結果をホームページ等で公表しています。万が一、基準を超える農産品があった場合には、出荷制限指示が出されます。

米については、県内で生産される全ての米を対象にスクリーニング検査をした上で全量全袋検査を実施して、安全性を確認してきましたが、2015年以降、通算5年間基準値超過がないことから、12市町村を除き、**令和2年産米からモニタリング検査**に移行しました。米の放射性セシウムの基準値は1kgあたり100ベクレルですが、2015年以降に収穫された米は、すべて基準値以下になっています。

### <スクリーニング検査とは>

放射性セシウム濃度が基準値より確実に低い検体を判別するための検査です。厚生労働省が定める「食品中の放射性セシウムスクリーニング法」において、スクリーニングレベルは、基準値の1/2である50ベクレル/kgとされており、スクリーニングレベルを超過したものは緊急時環境放射線モニタリング調査で正確に測定し、出荷の可否を判断します。

出典：福島県復興情報ポータルサイト「産地における検査のしくみ」